

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2008年3月 NO.11

SMILES

<http://www.childfund.or.jp>



チャイルドたちのお手伝いシリーズ

11

“ 野菜を売る準備 ”

裏庭の畑で収穫したチンゲンサイを、家の前の共同井戸で洗い、束ねるチャイルド(14歳)。チンゲンサイは一束約3ペソ(7円)で売り、家計のたしにします。魚とあわせてスープの具にしたり、炒め物として食べるのが一般的。

写真: センター27 (イサベラ州サンチャゴ)

ChildFund
Japan

～CCWA国際精神里親運動部は、
2005年3月チャイルド・ファンド・ジャパンに法人変更しました～

特集

「自己啓発プログラム」で、
自分を磨く

～チャイルドと親たちの挑戦～

フィリピンから届くお手紙や『チャイルドの成長記録』にはしばしば『自己啓発プログラム(value formation)』という用語が登場します。日本では、研修などで用いられている表現ですが、『自己啓発』という言葉には、まだなじみが薄いようです。フィリピンの支援活動の中で最も重要な一つであると、フィリピンのスタッフが胸をはる『自己啓発プログラム』を取材記事やインタビューを交えてご紹介します。

例えば

これが自己啓発プログラムで行われているワークショップです

～実践編：学校や地域の集まりで試してみませんか？～

ワークショップ“私(僕)は個性的!”

対象:6-9 才のチャイルド

目的:自分も他の人も、それぞれ個性があることに気づき、誇りに思う。

時間:2 時間

ルール:他の人の意見に耳を傾けて、誰の発言も否定しないこと!



イラスト:ヨシタケ シンスケ

- 進行:1.司会進行役(スタッフ)は、参加者のチャイルドが集まるまで、音楽をかけてリラックスさせる
- 2.集まってきたら、自分の居心地のよい場所に座ってもらう。
- 3.ワークショップの目的を説明する
- 4.チャイルドを5～6 人のグループにわけて、グループごとに1 列に並ぶ。
- 5.自分の特徴を他の人と比べて当てるゲームをする。
グループの中で、“自分が何番目に背が高いと思う?”
“自分が何番目に短い髪をしていると思う?” etc
あたたかチャイルドはそのつど、ほめる(約30分)
- 6.ゲーム終了後、チャイルドに以下の質問をする
- ①他の人とは異なる自分の個性(特徴)はなんだと思う?
 - ②なぜ、他の人と自分は異なると思う?
 - ③自分自身の個性(特徴)で何か変えたいことはある?
 - ④それはどんなこと?なぜ、変えたいの?
 - ⑤今日のゲームで、何を学んだ?
- 7.進行役はチャイルドからの答えを引き出しながら、個々の答えを整理していく。
- 8.最後に“私たちは皆異なった容姿、異なった行動、異なった考え方をする。双子だって、異なっている。だから、“私たちは自分の個性をほこりに思い、生かされていることに感謝をしよう”ということに参加者自身が気がついて終了。



熱弁するセンタースタッフの
フランシスさん

《センター30のスタッフのフランシスによる、ワンポイントアドバイス》

- * 初めて参加する人は、恥ずかしがって引っ込みがちになるもの。全員がリラックスできるよう、音楽やジョークで最初に場をなごませるとgood です。
- * 進行役が恥ずかしがっていると、参加者を巻き込めませんよ。自信をもっていきましょう。100 人には100 とおりの進行方法があります。結果より、過程が大切。一番のポイントは、進行役も一緒に楽しむこと!

『自己啓発プログラム』について フィリピン事務所所長に聞きました

Q チャイルド・ファンド・ジャパンは、支援活動の大切なプログラムであるバリュー・フォーメーション(文字通り訳すと価値形成)を日本語で自己啓発と表現しています。でもバリュー=価値って何ですか？

A 価値とは、私たちが毎日生きていくうえで、また岐路にたったとき選択に優先順位をもたらしたり、私たちの行動に一貫性や連続性を与える規範だと思います。

Q フィリピンでは人びとのもつ価値観に変化があるのですか？

A 最近、多くの国でモラルの低下ということが叫ばれています。フィリピンでも、長年にわたって家族を支えてきた互いに助け合うという価値観を損ないかねない、富や力を追い求める傾向が、社会の中で、またメディアによって助長されています。さらに、貧困や生活苦が、子どもたちの状況を改善しようという意志さえ失わせるような無力感や絶望感を生み出しています。

Q そのような変化の中で、自己啓発プログラムの目的は何ですか？

A 目的は、積極的な思考を育み、否定的な考えや厳しい日常にチャレンジしていくのに不十分な価値観を変えていくことにあります。積極的な価値観を持つことにより、人は、自分が役に立ちうる存在であるという自覚や社会的責任を意識できるようになります。自己啓発プログラムの核には、人はその行動で変化をもたらすことができるという基本的な確信があります。スポンサーシップ・プログラムが最も良い例です。チャイルドとスポンサーはそれぞれが意識し合い、影響し合いながら、建設的な関係を築いていきます。自己啓発プログラムは、自尊心や人は人生を良いものに変えていく力があるという信念を形成することに焦点を合わせます。さらに、このプログラムでは、信頼、家族の愛、勤勉というフィリピンの文化的価値観を補強しながら、子どもたちや家族が自分たちの成長と地域の発展に参加しつつ、誠実、平和、正義という社会的、スピリチュアルな価値観を身につけることができるように奨励しています。

スタッフや外部の専門家が司会進行役になって、ワークショップや座談会形式で参加者の内面の気づきを引き出していきます。



チャイルドと親がいっしょに参加するプログラムもあります。

フィリピン事務所所長 リナ・ムンサヤック

“バリュー・フォーメーション”を日本で紹介するにあたって

～翻訳に込められた思い～

1980年代後半、チャイルド・ファンド・ジャパンは、フィリピンでバリュー・フォーメーション(value formation)と表現されている活動を「自己啓発プログラム」と表すことにしました。当時、この活動をどのように訳すか、事務局の中でずいぶん議論を重ねたことをおぼえています。フィリピン事務所所長がインタビュー記事で語っているように、このバリュー・フォーメーションは、自分の存在の価値に気づき、家族や身の回りの人びととの間で、その人たちと積極的、建設的な関係を作り上げていく価値観を持つことを目的としています。

バリューは「価値」、フォーメーションは「形成」を意味しますから、この活動を文字通り訳せば「価値形成」とでも訳せます。しかし、「価値形成」では意味が通じない、フィリピンで実際に支援する活動を十分に表現することができないとの意見が、事務所内では大勢を占めました。正確に訳せないならカタカナでそのまま表現することや「道徳」など、いくつかの選択肢が検討され、自分に価値を認め、自分を高めていくことを表現できるという理由から「自己啓発プログラム」という訳語に落ち着きました。

厳しい貧しさの中でも、多くの困難な中でも、チャイルドたち、両親、地域の人びとが、自分の価値を受け入れ、より積極的な姿勢で生き抜いてくれるという期待と共に、バリュー・フォーメーション=自己啓発プログラムは、スポンサーシップ・プログラムによる支援事業で重要な位置を占め、チャイルド・ファンド・ジャパンの支援事業を特色づける大切な活動となっています。

事務局長 小林 毅

チェニ ガブチン(16歳:ハイスクール4年生)の場合

『自己啓発プログラム』で変化をしたチャイルド取材したいと『自己啓発プログラム』の充実ぶりで評判のセンター30 にお願したところ、紹介をされたのがチェニです。チェニはセメントやニッパやしでできた質素な家で暮らしていて、父親は空き瓶や廃材を売買したり、魚の行商をしたり、農場の季節労働者をして生計を立てているとのことでした。チャイルドの典型的な家庭環境といえます。

取材をすると緊張してしまうチャイルドが多い中、チェニは初対面の日本人相手でも落ち着いて打ち解けた印象でした。スポンサーの名前を尋ねると「クマモトライトハウス*」と即答。もともと明るく積極的な性格なのは？

*熊本県にある目や耳に障がいを持っている子どもたちの施設「熊本ライトハウス」と知的障がい者の更生施設「熊本ライトハイス のぞみホーム」のこと。両施設のスタッフの有志で支援をしてくださっています。



チェニ ガブチン

チェニ「チャイルドになる前は、恥ずかしがり屋で、人の前で話すことが怖かったです。理由？よくわからないけれど、いつも不安で自分の意見を他の人が聞いてくれると思えなかった。センター(自己啓発プログラム)活動は、最初は緊張して、どちらかというとな鬱でした。でも参加するうちにどんな意見をいっても「間違っている」と否定をされないし、馬鹿にされないから、自分の考えが人と違っていてもいいのだとわかって、楽になりました。今はビーズ細工の作り方を、年下のチャイルドたちに教えたりしています。」

「自己啓発プログラムで」一番変わった点を1ついうと?との質問には「自信」との返事が返ってきました。

センター長へのインタビュー

～最初から、うまくいくことなどありません～

チェニの成長を見守ってきたセンター長のリーさんに『自己啓発プログラム』実践のコツを聞いてみました。『ワークショップがいつもうまくいくとは限りませんよ。難しいと思うことは、もちろんあります。そもそもどうして、自己啓発プログラムが必要とされていると思いますか？

貧しい生活を恥じて、積極的になれない、自信がない子どもや親が多いからです。いくらよい教育や職業訓練の支援をしても、本人が積極的になれなければ効果はあがりません。チェニに限らず、自己啓発には時間がかかります。自分の可能性を信じられるようになるには時間がかかるのです。センターにできることは、自己啓発を行うスタッフの訓練を重ねること、今はそのノウハウを形にして誰でも使えるように本*にまとめています。

*P2で紹介したワークショップは、この本からの紹介です。



リーさん



「自己啓発」のワークショップの様子。積極的に手を挙げる子どももいれば、ためらう子どもも。

日本人スタッフの『自己啓発プログラム』体験記

『なるほど、これが…。』初めて『自己啓発プログラム』に参加したのは、子どもたちが金鉱堀の手伝いをするという地域でのことです。チャイルドの親たちが30名ほど小さな教会に集まっていました。突然流れてきたのは映画『タイタニック』のテーマソング。“この音楽が流れている間、目を閉じて今までで一番家族という幸せだったときを思い出してください”と進行役が促します。

しばらくして、1人また1人と、幸福な時期がいつだったか皆の前で話し始めました。初めて子どもが歩いたとき。夫が賭け事を止めると宣言した日。家族が久しぶりに集まったクリスマスの夜。音楽が鳴り止み、しばしの沈黙の後、進行役が一言。

“それで、今のあなたと家族の関係はどうですか？”

この後の心の動きをうまく説明することは難しいのですが、その瞬間確かに私も自分にとって家族がいかに大切か、そして最近まったく感謝の言葉を伝えていないとの後悔がこみあげてきました。その場にいたチャイルドの親たちに対して、仲間意識が生まれていることに気がついたのは、皆にお別れをいうときでした。大切な思い出や痛みをわかちあった人たちは、すでに“他人”ではなく、このような気持ちが積み重なって地域の“協力”が育まれていくことを知りました。フィリピンを訪れるたびに、日本の私たちにこそ、『自己啓発プログラム』が必要なのではと感じています。

支援者サービスグループ 小野

支援者が見た、『自己啓発プログラム』の果実

2008年2月に「フィリピン訪問の旅2008」の参加者17名が3つのセンターを訪問しました。旅の間に出会った顔・顔・顔です。チャイルド、親、地域の人たちの表情をぜひご覧ください。



小澤さんから運営についての質問に堂々と答える協同組合のリーダー。旅の参加者からは「カッコイイ!」とのコメントが。<センター 41>



メンバー数700人を誇るこの協同組合を運営するお母さんたち。<センター 41>



チャイルドの成長をスポンサーの平林さんご夫妻に報告する母親 <センター 41>



有機肥料を作るお父さん。くしくも福島県で同じ取り組みをしている鈴木さんと。<センター 30>



大学でレストランマネージメントを学ぶ元チャイルド。日本の文化紹介として出された味噌汁をよそってくれました。ピシッと背筋を伸ばして、学んだ技を披露 <センター 30>



上の肥料を使って、有機栽培で野菜を作っているお父さん。“結局、有機栽培が一番なんだよ” <センター 30>



参加者にもお土産として好評でした。収入向上のため、カゴを編んでいるお母さんたち。<センター 41>

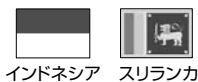


参加者にダンスを披露する『地域子ども文化グループ』のチャイルドたち。前日は遅くまで練習に励んだとか。<センター24>

上のダンスを指導した元チャイルド。今は学校の先生です。センター長に紹介されて。<センター 24>

インドネシアおよびスリランカにおける津波被災者の復興支援事業

[津波から3年。子どもを守る地域社会の復興へ]



インドネシア スリランカ

- 協力期間:2006年5月～
- 支援対象:インドネシア:アチェ州(アチェ・ジャヤ県、アチェ・バラット県)の津波被災者(2500名の子どもたちとその家族500世帯)
スリランカ:アンパラの津波被災者1000名
- 協力団体:インドネシア:CCFインドネシア*Christian Children's Fundのインドネシア事務所
スリランカ:CCFスリランカ*Christian Children's Fundのスリランカ事務所

スリランカとインドネシアで行われていた津波被災地域での支援事業が、それぞれ昨年4月と10月に終了しました。インドネシア、アチェ州の事業地域を2007年12月に視察した、連絡調整事務所の松浦宏二の報告です。

アチェ州では津波から3年目の昨年12月、赤十字や国際NGOにより建設された住宅が10万戸に達したことを記念する式典がありました。津波で破壊された道路の復興も進んでいます。インフラ回復の支援が継続される中で、チャイルド・ファンド・ジャパンは、地域社会を復興し、その中で子どもたちの問題を解決していくための支援活動を15カ所の地域で行ってきました。

各地域に、アチェの伝統的な地域集会施設である「ジャンボ」を設置し、ここをチャイルド・センター・スペースとして、図書室活動、デイケア活動、イスラム社会の伝統的な教育活動、青少年によるスポーツや演劇などの文化活動を行ないました。これらの活動は、津波の脅威に晒された子どもたちの心の傷を癒すと共に、新たな生活への希望と自信を大きくむものとなりました。活動の実施はコミュニティから選ばれた代表と地域の委員会が中心となって行い、復興に向けた社会のつながりを取りもどす契機となりました。

生計手段を失った家庭や青年たちには、木工、洋裁、菓子作り、オートバイ修理などの技術研修が行われ、必要な道具や機材が支給されました。支援事業を統括したChildFund Indonesia では、今後数年にわたり、マイクロクレジット(小規模資金の融資)の提供を通じて、これらの家庭や青年たちの生計活動を支援し、地域の経済活動の活性化を目指す予定です。チャイルド・ファンド・ジャパンからの支援金の残金(約200万円)も、この活動のために継続して利用されます。



*この事業の総括は、スリランカでの活動とともに2007年度の年次報告書でご報告いたします。

図書館活動のために集まった子どもたち。後ろの建物「ジャンボ」はアチェの伝統的なコミュニティ集会施設で、この1階部分に図書館が置かれ、2階ではデイケア活動が行われる。

保健行政システムのキャパシティ・ビルディングによるネパールの女性と子どもの栄養改善計画 [母親教室]



ネパール

JICA草の根技術協力事業(パートナー型)として実施

- ◆ 協力期間2006年10月1日～2009年9月30日
- ◆ 支援対象:ネパール保健省、中部・西部地方の5郡の全保健行政スタッフ(当初6郡から変更)
- ◆ 協力団体:NPCS (Nutrition Promotion and Consultancy Service)

* ネパールのNGO。貧困層や社会的弱者の栄養改善をはかるため、地域の住民への保健教育や他のNGOスタッフ、行政官への研修を実施する。

ナマステ!^{※1} 今回は、女性地域保健ボランティアによる母親を対象とした草の根レベルでの栄養教室を、ネパールに駐在している吉田希が紹介します。これまでにこの事業では、2007年2月に郡中央レベルで開催した①アドボカシー^{※2}ワークショップを皮切りに、②郡保健所・郡病院スタッフ、③ヘルスポストスタッフ、サブヘルスポストスタッフ、④女性地域保健ボランティア^{※3}と4レベルの研修を終えています。

ダーニン郡マイディ村では、研修を終えた女性地域保健ボランティアが母親を対象に健康教室を毎月1回開いています。1月の教室では、食生活改善アプローチ研修で習った「サルボタンピ(栄養改善食)」の作り方を教えることにしました。

1月15日の栄養教室当日。ネパールの祝日に関わらず、集まったお母さんは60名以上!「今回の健康教室は調理実習を行うらしいよ」という話しは口コミであっという間に広がり、いつもの3倍のお母さんが集まりました。女性地域保健ボランティアにとっても初の調理実習、緊張は高まります。まずは栄養紙芝居を使って「サルボタンピ(栄養改善食)」について説明します。

「サルボタンピは、病気の時の食事として、離乳食代わりとして、補食として、子どもにあげましょう。サルボタンピの材料は、大豆2 カップ、小麦・とうもろこし各1 カップです。それらを炒り、石臼で粉にします。鍋に粉と水を入れ、火にかけ練り、蕎麦掻状にします。最後に緑の野菜を加え、出来上がりです。」女性地域保健ボランティアの声がか村中に響き渡ります。準備から後片付けまで1日がかりとなったこの教室。しかし、女性地域保健ボランティアは疲れも見せず「楽しかったわ。お母さんたちが積極的に参加して本当に助かった!いつもの講話だけの教室より実演があった方が、お母さんたちも大勢出席してくれるので、またやりたい。」と大満足だった様子。

女性地域保健ボランティアの挑戦はまだ続きます。

「家にとうもろこしがなかったら、何を代わりに使えば良いの?」お母さんたちからの質問に答えるのに忙しい女性地域保健ボランティアの代わりに、手の空いているお母さんがサルボタンピの調理を経験します。

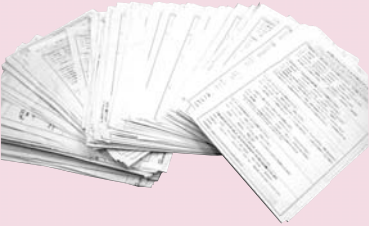


※1 ネパール語でこんにちは。 ※2 広くは政策提言を意味しますが、この場合はネパール行政への啓発活動をさしています。

※3 女性地域保健ボランティアは、村の地区毎に各1名ずつ村人によって選ばれます。字が読めること、既婚者であることが条件となっています。今回のような健康教室の他に、予防接種や体重測定等、保健事務所の草の根レベルの活動を手伝っています。

ハロハロのページ

アンケート結果発表



チャイルド・ファンド・ジャパンは、2007年に機関紙や年次報告書について皆様からご意見をいただいたり、コミュニケーションの方法を考える参考にするため、「よりよいコミュニケーションに向けたアンケート」を実施いたしました。ご協力くださった皆様、本当にありがとうございました！ *報告内容は紙面の都合により、主な項目にしばってお伝えいたします。



編集担当:小野

〈アンケート・データ〉 送付対象:機械紙を送付している個人・団体すべて
方法:2007年7月発行「SMILES」9号、年次報告書にアンケートを同封
返信数:309(全体の約4.8%)

SMILES 9号の報告内容

90%の方が“わかりやすい”と答えてくださり、ほっとしています。しかし、これに甘んじず100%を目指していきますので、これからもご意見・ご声援をよろしくお願ひします！ また、機関紙の発行回数は、84%の方が「ちょうどよい」と答えてくださいました。来年度も年3~4回の発行を予定しています。

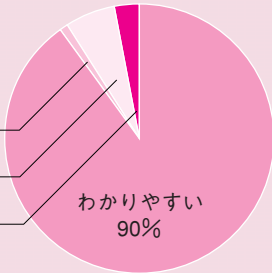


わかりにくい 1%

どちらともいえない 6%

無回答 3%

わかりやすい 90%



SMILESの文字の大きさ

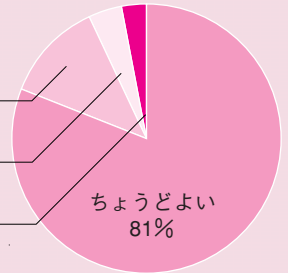
機関紙、年次報告書ともに、文字の大きさに心がけて編集をしてきましたが、12%の方から小さすぎるとのご指摘をいただきました。新聞紙の文字の大きさを基準に、紙面が許す限り大きな表示をしていきたいと思います。

小さすぎる 12%

どちらともいえない 4%

無回答 3%

ちょうどよい 81%



年次報告書の報告内容

「どちらともいえない」との回答が17%にのびました。年次報告書は内外へ向けて団体の活動を正式に報告する役割があるため、どうしても説明が固くなる傾向があります。報告書としての正確さや質を保ちつつも、データ、表、写真を活用するなど見直しをしていきたいと思います。情報量に関しては「ちょうどよい」が78%、「どちらともいえない」12%、「多すぎる」7%、「少なすぎる」1%でした。

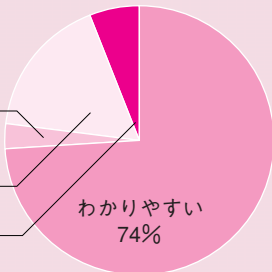


わかりにくい 3%

どちらともいえない 17%

無回答 6%

わかりやすい 74%



インターネットの使用

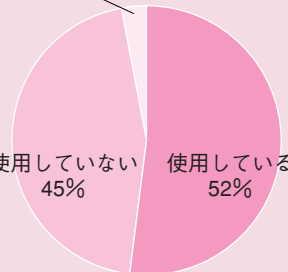
インターネット上のホームページは経費が安く、より早く情報をお知らせできるという利点がありますが、事務局ではこれからも支援者の方へ情報を等しくお送りできるよう、紙媒体とHP両方に力を入れていきます。

インターネットを使用されている方で、チャイルド・ファンドのHPを見る方は「毎日」「1週に1度」が各4%、「1ヶ月に1度」17%「ほとんど見ない」と「見ない」をあわせて71%でした。動画や新しい企画もありますので、インターネットをご利用の方はぜひご覧ください!!

無回答 3%

使用していない 45%

使用している 52%



自由筆記欄のご意見より:「機関紙・年次報告書が立派すぎる。1円でも多く支援活動に活かしてほしい」(6名の方から)

現在、機関紙1部にかかる費用はデザイン・印刷をあわせて約40円。カラー印刷を使用しない場合は、約34円です。(送料別)事務局は、皆様に支援に関わる情報を分かりやすくお伝えすることも大切な役割と考えております。また、皆様からの「チャイルドの生活がわかりにくい」とのご意見をもとに、写真を大きく掲載するのに効果的なカラー印刷を取り入れています。“1円でも多く”のご意見を心に刻み、経費削減にも取り組みながら、紙面づくりに努めてまいりますので、どうぞご理解くださいますようお願いいたします。今後も皆様からのご意見をお待ちしています!

インフォメーション コーナー

お知らせ

ホームページに新しい情報が満載です!!

チャイルド・ファンド・ジャパンのホームページに、フィリピンのチャイルドの sponsor としてご支援いただいている、読売巨人軍コーチ 篠塚和典さんと江角マキコさんの動画メッセージを掲載しました。ぜひご覧ください。また、ご支援いただいている音楽家の方々にチャイルド・ファンド・ジャパンのイメージソングを作っていただきました。ホームページ

左下にある3人の音楽家の写真をクリックして、ぜひお聴きください。

<http://www.childfund.or.jp/>



チャイルドのストーリーも紹介しています

お知らせ

ネパール栄養事業報告会のご案内

ネパールに赴任している吉田希職員が一時帰国して、プロジェクトの報告会を3箇所で開催します。現場でしかわからない、生きた情報が満載です。ぜひご参加ください。

北海道札幌市

2008年3月20日(木) 10:30 ~ 11:30

会場: 藤女子大学北16条キャンパス

2008年3月20日(木) 14:40 ~ 15:40

会場: 『北海道道民活動センター

かでの2・7』1040研修室

2008年3月29日(土) 14:00 ~ 15:30

会場: チャイルド・ファンド・ジャパン東京事務所

《お問い合わせ・お申込み》

東京事務所プログラム・グループ: 細井・磯貝

TEL: 03-3399-8123 (月 金: 9:30 ~ 17:30)



東京都杉並区

お知らせ

『第2回ピース・チャリティ・コンサート』の申し込み受付中です!

2006年に続いて、ヴァイオリニストの林原澄音さんが、ヴァイオリンの名曲を集めたチャリティ・コンサートを開催していただきます。チケットの売り上げはチャイルド・ファンドを通して、アジアの子どものための支援金となります。

日時: 2008年4月12日(土) 19:00 ~

場所: 東京オペラシティ近江楽堂

チケット: 1枚4,000円

定員: 100名(全席自由席)

枚数に限りがありますので、お申し込みは早めに事務局までお願いします。

TEL: 03-3399-8123

(月 金: 9:30 ~ 17:30)



© Hattori Hideo

報告

7年ぶりの『フィリピン訪問の旅』無事に終了しました!

2月8日から13日まで実施した「フィリピン訪問の旅」は、チャイルドの笑顔と、参加者の方々の真摯なまなざしに包まれて、無事に終了しました。3つの島を渡る今回の旅には、北は新潟から南は福岡まで17名の方々がご参加くださいました。参加者のコメントを一部ご紹介します。『若くして家族の重さを担う子どもの真剣な表情が心に残りました。』『日本では一番大事な「人と人とのあたたかい交流」がないが、一方フィリピンでは色々なものが無いけれども一番大事なものがあると感じた。

「自立」が大事ということもよく分かった。』

*「訪問の旅」の様子は、P.4でもご紹介しています。



参加者の山根さんと家に向かうチャイルドのジョウエル

報告

『スマイリング・パートナーズチャリティゴルフ大会』報告

2007年12月4日、篠塚和典さん(写真中央)の主催で、第三回スマイリング・パートナーズチャリティゴルフ大会が開かれました。

当日は昨年来を上回る235名の方々にご参加いただき、20名のチャイルドの支援を継続することができました。プレイ後のチャリティオークションでは、多くのご協力をいただきました。



オークションを盛り上げてくださった元巨人軍選手の宮本和知さん(右)と元木大介さんとともに

重要

領収書は寄附金控除に使用していただくことができません

2008年1月中旬に、支援者の皆様に領収書を送りいたしました。この領収書は寄附金控除に使用していただくことができません。国税庁より『認定NPO法人』の通知を受けましたら、皆様には直ちにお知らせいたします。ご理解くださいますようお願いいたします。お問い合わせは会計・庶務グループ吉川まで

報告

ネパール冬募金の報告

2007年11月末から2008年2月末にかけて実施した「ネパールオカルドンガ地域病院事業募金キャンペーン」へ計1,286口、総額10,858,961円の募金が寄せられ、募金目標の1,200万円まであと少しとなりました。皆様からのご支援に心より感謝申し上げます。支援プロジェクトへのご支援は、年間を通して受付けています。引き続きご支援よろしくお願いいたします。

感謝!

書き損じハガキ、続々集まっています。

年明けから新聞7紙に『書き損じハガキ』の募集記事を掲載していただくことができました。これにともない、事務局でも1993年以来、10年ぶりとなる計約7万枚もの書き損じハガキが全国から寄せられました。(1月~2月末現在)

*集計はボランティアさんのお力を借りて行っています。

お願い

チャイルドの卒業とご支援継続のお願い

今年も約400余名のチャイルドが、卒業により支援を離れます。これまで支えてくださった皆様に、感謝を申し上げます。フィリピンの英雄ホセ・リサールは「子どもたちは国の希望だ」との言葉を残しています。どうぞ、これからのフィリピンを背負っていく子どもたちに学ぶチャンス、人生に挑戦するチャンスをお贈りください。引き続きのご支援を、スタッフ一同心よりお願い申し上げます。

スマイルズ
<チャイルド・ファンドだより SMILES> 2008年3月発行

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン

理事長 深町正信(青山学院院長) 事務局長 小林毅

TEL: 03-3399-8123 FAX: 03-3399-0730 E-mail: childfund@childfund.or.jp URL: <http://www.childfund.or.jp/>